

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

共に生きる

横浜共立学園中学校 3年 長谷川 咲弥香

皆さんは身近で「発達障害」という言葉を聞いたことがありますか。あるいは、そのような方に出会ったり、見かけたりしたことがありますか。発達障害には主に三つの種類があります。自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如・多動症(ADHD)、学習障害(LD)と呼ばれ、これらは他人とのコミュニケーションや社会生活に困難を生じさせることができます。ここで、私が過去に出会った発達障害をもつ少女についての経験を話します。

彼女は、私が小学生の時、登校班が同じで一つ年下の少女でした。私は小学六年生の頃、登校班をまとめる役割である班長を務めっていました。彼女は発達障害を抱えていたため、じっとしていられず、道路の方に飛び出してしまいそうになり、つい「危ない」と注意したことがあります。すると、彼女は黙り込んでしまい、当時の私は発達障害者に対する接し方が分かりませんでした。なので、彼女に対して強くあたってしまうこともあります。後になって考えてみると、決して彼女自身が悪いわけでは全くなく、私のような周囲の接し方に問題があったのだと思い、自分の言動を深く反省したと同時に、強く後悔しました。

では、どのように接したら良かったのでしょうか。そう思い、発達障害について調べてみると、発達障害者には、状況や気持ちを伝えることが苦手であったり、一度に複数のことを言われると混乱してしまったりするという特徴があると知りました。そして、発達障害者とのコミュニケーションのポイントとして、わかりやすい表現で短くゆっくり話すことが大事だと分かりました。そこで、私は早速、そのポイントを意識しながら彼女と話してみて、実践をくり返しました。すると、彼女は次第に心を開いて話しかけてくれるようになり、頼りにされることも増えました。私は少しでも彼女のことを理解できた気がして、嬉しかったのをよく覚えています。私が小学校を卒業する際には、彼女から手紙をもらいました。そこには、「こんどは、わたしが班長です。がんばります。」とつづられていました。それから彼女とは会えていないのですが、いつかお互いに大人になって再会することができたら良いなと願っています。

さらに彼女は吃音症を抱えていました。吃音には、音を繰り返す「連発」、音を引き伸ばす「伸発」、ことば

を出せずに間が空く「難発」などの症状があります。どの症状があてはまるかは個人によってそれぞれですが、原因不明で、治療法も確立していないといいます。私が通っていた小学校には、様々な障がいをもつ生徒が在籍する「特別支援学級」というものがありました。時々、通常の学級と合同で行事や授業に参加するという機会がありました。特別支援学級には彼女のように吃音症の生徒もいたため、そのような場面で関わりをもてたことで大きく得たものがありました。それは、自ら障がい者と関わりをもとうとする勇気とあきらめない心です。

やはり私たちは障がい者に対して偏見をもっていたり、あえて距離をおこうしたりすることがあると思います。実際に今までの私もそうでした。しかし、発達障害を抱える人と出会い、交流することで、新たな発見がありました。一つは、障がい者は、周囲の理解とサポートを必要としていて、私たちはその思いに気づいて、本人が安心できる環境を整えることが重要だということです。また、これから生きていく上で障がい者と出会うことがあるかもしれません。そんな時、障がい者と積極的に関わり、根気強く付き合いを続けることが、「共に生きる」ということにつながると信じています。

これらることは障がい者だけでなく、世の中にある差別や偏見に関しても言えることだと考えます。もちろん世の中にある全ての差別や偏見を「なくす」ということは難しいと思われます。一方で、差別や偏見を「減らす」ことはできるのではないでしょうか。

だからこそ、まずは相手を知り、理解しようとするところから始めてみませんか。

そして、「共に生きる」ということを一緒に目指しませんか。